The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Dasaveyāliya-sutta の本文について
——現存ジャイナ教白衣派古聖典本文の伝承——

渡　辺　研　二

はじめに

いったいわれわれの見ている現存ジャイナ教白衣派古聖典とは，どのようなものであろうか．この問題は，ジャイナ教研究における基本的な問いであるのにもかかわらず，今まで必ずしも明確にされてきていなかったようである．ジャイナ教現存聖典の本文の読みについては，各地に残る写本の伝承，種々に出版されている刊本の読み，そこに含まれる異読資料などに様々な伝承が伝えられているが，その異読資料の内容に関しては大差がない，ということが認められている．しかし，従来，あまり参照されることがなかった古注釈チュールニに，注目されるべき異なった伝承が保存されていることが，学者の近年の研究によって判ってきた．本論では，古聖典の *Dasaveyāliya-sutta* の既存のテキスト本文の読み -esu に対し，チュールニの伝える本文の読み -ehiṃ を例にとり，現存ジャイナ教白衣派古聖典本文の伝承について論じる．

（1）pupphesu と pupphehiṃ について

ジャイナ教白衣派の古聖典 *Dasaveyāliya-sutta* は，冒頭，出家修行者が村里に入って托鉢をするときの，物事に執着しない，淡々とした気持ちを，蜜蜂に譬えた詩句によって伝えている．すなわち，第1章第2-4詩節において「蜜蜂と托鉢僧」の比喩が見られる．

jahā dumassa pupphesu bhamaro āviyai rasaṃ/
na ya pupphaṃ kilāmei so ya pīṇei appayaṃ//2//
em ee samaṇā muttā je loe santi sāhuṇo/
vihaṃgamā va pupphesu dāṇa-bhatta'esaṇe rayā//3//
vayaṃ ca vittiṃ labbhāmo na ya koi uvahammaī,
ahāgaḍesu rīyante pupphesu bhamarā jahā//4//[1)]

この詩節の内容は，本邦初訳の松濤誠廉先生の和訳では，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

(2) 樹の諸々の花において，蜂は蜜を吸い，花を傷めず，また，自己を満足せしむる如く，
(3) かくの如く，世間に於いて，優れたる修行者（sādhu）にして解脱せるそれ等沙門は，空を行く者（＝蜂）等の諸々の花に於ける如く，施と食との乞に関わるべし．
(4)「吾々もまた，生（vitti = vṛtti）を得，誰もまた，害わるる者なし．」諸々の蜂のたまさかに現れたる花に向う如く．

となっている[2]．この和訳によって，詩節の意味が把握できる．

（1）－1．特に Dasaveyāliya-sutta 第1章第4詩節のテキストについて

一方，Dasav. I, 4 にはロイマン，シュブリング，松濤の三先生の参照していないチュールニ（Cuṇṇi）に異なった本文が別に伝えられている．即ち，

vayaṃ ca vittiṃ labbhāmo na ya koti uvahammati/
ahāgaḍehiṃ rīyaṃti pupphehiṃ bhamarā jahā//4//[3]

となっている．両者の下線部を比べれば，一目瞭然，ロイマン版の ahāgaḍesu rīyante pupphesu とチュールニの ahāgaḍehiṃ rīyaṃti pupphehiṃ との読みの違いに目が付く．つまり，-esu と -ehiṃ の曲用の変化が問題になる．この AMg.-esu は pl. Loc. である．そして -ehiṃ の曲用は AMg. では pl. Loc. と pl. Inst., Ab. という三つの可能性がある AMg. 特有の oblique forms である．先行する Dasav. 第1章第2, 3 の詩節で pupphesu という語形が2度現れて，そこではチュールニも pupphesu と読み，他の異読も伝えられていないので，第1章第4詩節のここの読みについてはチュールニは明確な意図を持って pupphehiṃ と読んでいることが知られる．難解な読み pupphehiṃ をチュールニが意識的に残していることは，いったい何を意味しているのであろうか．はたして，ここは文献学にいう「難解（困難）な本文（読み方）の方がよい」（difficilior lectio potior）ということが，妥当するのであろうか．ロイマン版では「花」（AMg. puppha = Skt. puṣpa）が複数・於格（pl. Loc.）であるのに対し，チュールニの読みは，語形からアルダ・マーガディー語の複数・具格（pl. Inst.），複数・於格（pl. Loc.）または複数・奪格（pl. Ab.）であると見ることができる．一方，動詞 rīyante（ロイマン版）をシュブリング先生[4] は They go where... と英訳し，松濤先生は「花に向う如く」と，両先生共にハリバドラのサンスクリット語の注釈の解釈「rīyante とは，“彼らは行く”，という意味で，“活動する”，という意味である」（“rīyante” gacchanti, varttante ityarthaḥ; Hāribhadrīya）という解釈を採用しているようである．一方，チュールニは「rīyaṃti とは，彼らは，満足を得る，（ということである）」（rīyaṃti tṛptiṃ uvalabhaṃti）と動詞の意味とは，直

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

接関係のない解説的解釈をしている．さて，pupphesu に関しては，両先生ともに場所を意味する複数・於格（pl. Loc.）を，動詞 rīyante の目的を表す業格（Ac.）の意味に解しているようである．ではチュールニの読みの複数・具格（pl. Inst.）または奪格（Ab.）はどのように解釈できるであろうか．テキストを見た最初，pupphehiṃ は一見して複数・具格（pl. Inst.）であるとすぐに考えたが，この文脈では具格はどうにも意味が付けられないので，とりあえず具格にとるという案は措いておき，まず動詞 rīyante（ロイマン版），rīyaṃti（チュールニ）の元の意味を探ることとする．この動詞 rīyante は語根√ri の動詞である．その最も普通の意味はモニエルなどの普及している梵英辞典によれば，“to release（RV), detach from (abl.)” という意味が見られ，Ṛg-Veda では Ab. をとって「～から離れる，分離する」という意味があると説明されている．これが，この文脈にふさわしい意味と思われる．そこで pupphehiṃ は複数・奪格とみなすことが妥当であると判断する．文脈からは，「蜜を取る」という用事の済んだ蜜蜂たちは「花に向かって行く」のではなく，「花から離れる」という意味が，名詞の奪格（Ab.）と動詞「～から離れる，去る」の原意から見て，さらに第１章全体の「蜜蜂の行動」の文脈から見て適切な意味である，と判断されるのである．そこでチュールニの伝える Dasav. 第１章第４詩節の意味はつぎのようになるであろう．試訳:「われわれは今，生活の糧を得ている．今ここで，何も傷つけられていない」といって，蜜蜂たちは，このように為された花々から離れる．（そのように，托鉢僧たちは施食を受けた後，施主の家から離れる）」．

（１）－２．仏教の『ダンマパダ』49 番との比較

更に，注目すべきは，この「蜜蜂と花」の比喩は，仏教の古い経典『ダンマパダ』（『法句経』）にもあらわれる．『ダンマパダ』49 のテキストを観察すると，

『ダンマパダ』49: yathāpi bhamaro <u>puppham</u> vaṇṇagandhaṃ aheṭhayaṃ
<u>paleti</u> rasam ādāya evaṃ gāme munī care.（Ed. by von Hinüber and K. R. Norman）
蜜蜂は（花の）色香を害わずに，汁をとって，<u>花から飛び去る</u>．
聖者が，村に行くときは，そのようにせよ．（中村元訳）下線筆者

中村元先生の翻訳[5] は，新しい研究に基づく新訳であり，従来の解釈は「蜂が華と色と香とを損せずに蜜を取りて飛び去る如く，智者の村に乞食するも亦然るべし」[6] という荻原先生の翻訳によって知ることができる．荻原先生の和訳は原

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

文に忠実で，『ダンマパダ』の原典理解にすこぶる有益である．中村先生の新訳と併用することで，詩節のもつオリジナルの意味に近づくことができる．

この『ダンマパダ』puppham...paleti は「花から飛び去る」の意味で，普通，一見したところ puppham は，その語形からみて業格（Ac.）に解されるが，このパーリ語 puppham に関して，R. アルスドルフ先生の研究によれば東部インド語つまり古アルダ・マーガディー語においては男性および中性の単語の単数・奪格が -am で終わると判明した．したがって，アルスドルフ先生に従って，この puppham は見た目の業格（Ac.）ではなく奪格（Ab.）であると理解される．しかし，『ダンマパダ』の英訳を発表されているノーマン先生は，この箇所における puppham vaṇṇagandham を分離複合語とみて，「花の色や香を」という意味にとる．また，J. ブラフ教授は『ガンダーリー・ダルマパダ』の訳注の中で，二つの Ac. を二重目的語に解釈する．このように学者によって，様々な解釈が可能ではあるが，この puppham の -am を古代東部インド語の奪格（Ab.）とするアルスドルフ先生の解釈を採用すれば，『ダンマパダ』のテキストは「蜜蜂は，花から，飛び去る」という単純明解な表現になり，文脈に自然な形で合致する．さらに，ジャイナ教のチュールニの読み rīyaṃti pupphehiṃ（[蜜蜂たちは] 花から離れる）というように，単数と複数の違いはあるが，共に奪格をとって「花から飛び去る」（Dhp. 49）と「花から離れる」（Dasav. I, 4）という解釈に一致することとなる．更に中村元先生によれば，パーリ語 paleti の -l- が -r- にならないのは，東部インド語の方言の影響であるという．良く知られているようにマガディズムと呼ばれるもので，古代東部インド語の方言では，r は l になる特徴がある．

これら中村先生の指摘に加えて，ジャイナ教のテキストの言語について一言すれば，Dasav. I, 4c の読み ahāgaḍehiṃ の ahāgaḍa-（Skt.yathā-gata）の語頭の y- は，普通のプラークリット語では j- になるところであるが，ここでは語頭の y- は落ちている．これも古代東部インド語の特色である[7]．さらに Skt.-gata は普通のプラークリット語では -gaya になるが，ここでは -gaḍa と -d- がセレブラル化しているのも古代東部インド語の特色である（Pischer §21）．さらに問題の ahāgaḍehiṃ...pupphehiṃ の -ehiṃ も古代東部インド語の曲用形であった．このように見てくると有名な仏教の『ダンマパダ』49 もジャイナ教の Dasaveyāliya-sutta 第 1 章第 4 詩節も共に古代東部インド語つまり古アルダ・マーガディー語の痕跡を残す古い言い回しをそのまま現代に伝えているということになる．したがって，『ダンマパダ』49 と Dasav. I, 4 の本文は，言語の特徴からみて，リューダー

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ス先生[8] の主張する原始聖典（Ur-Kanon）の古伝承，つまり起源として大変古い伝承を伝えている，といえるであろう．

（2）bhogesu と bhogehiṃ について

evaṃ karenti sambuddhā paṇḍiyā paviyakkhaṇā,
viṇiyaṭṭanti bhogesu jahā se puris'uttamo// tti bemi（Dasaveyāliya-sutta II, 11）

チュールニのテキスト：

evaṃ kareṃti saṃpaṇṇā paṃditā paviyakkhaṇā/
viṇiyaṭṭaṃti bhogehiṃ jahā se purisuttame//11// tti bemi// 下線筆者

シュブリング先生英訳：

Thus act awakened, wise and far-sighted［men］. They turn away from［sensual］pleasures like that hero, Thus I say.

松濤誠廉先生和訳：

賢者にして炯眼ある覚者は，かくの如くに行い，かの最勝の人と同じく，諸々の享受の物に於いて身を制す（vinivartanti, 身を退く）．かく吾れ言う．

特にシュブリング先生は，訳注の中で，ここの bhogesu と 8, 34 の bhogesu は Ablative の意味の Locative であると解説されている．(Schubring's note: bhogesu here and below, 8, 34, loc. in the meaning of abl.)．このシュブリング先生の推測は，チュールニの読み bhogehiṃ にまさに合致する．ハリバドラの注釈には［vi］nirvartante bhogebhyo viṣayebhyaḥ とあり，bhogebhyaḥ は bhoga- の複数・奪格を示唆している．おそらく，シュブリング先生はハリバドラの注釈からこのように解説されたものであろう．

ペテルスブルグ大辞典，モニエル梵英によれば，動詞 vi-ni-√vṛt は Ab. をとって「～をやめる」，「～から顔をそむける」の意味で，ここでは「享楽をやめる」あるいは「享楽の対象から顔をそむける」という意味になる．したがって，文法的にみても，意味の上からも bhogehiṃ と奪格にとることが相応しい．

チュールニの中では viṇiyaṭṭaṃti bhogehiṃ viseseṇa mahavvata-dharaṇeṇa ṇiyaṭṭaṃti bhogehiṃto, esā paṃcamī/ と注釈し，そこでは bhogehiṃ が奪格（Ab.）であり，語形は bhogehiṃto と読んでいる．

一方，ハリバドラの *Bṛhadvṛtti* は

［vi］nivartante bhogebhyo-viṣayebhyaḥ yathā ka ityatrāha—, nivartante bhogebhyo

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

と注釈して，bhoga- が複数・奪格であることを暗示している．

さらに Dasaveyāliya-sutta VIII, 34 は，

adhuvaṃ jīviyaṃ naccā siddhimaggaṃ viyāṇiyā/
viṇiyaṭṭejja bhogesu, āuṃ parimiyamappaṇo//34//

とあり，意味は，

シュブリング先生英訳：

Knowing that life is transient and the span of life allotted to him is limited, and having realised the path to perfection, he should turn away from worldly enjoyments.

松濤誠廉先生和訳：

生命は不堅固なりと知り，自己の寿命は限度あるを（知りて），成就に到る道を識別し，享受に於いて慎しむべし．

チュールニは聖典本文の読みは，ロイマン版と同様に bhogesu であるが，チュールニの注釈の解説の中では，bhogesu sadda-pharisa-rasa-rūva-gaṃdhehiṃto bhogehiṃ として，bhogehiṃ の読みを伝えている．ここも Dasav. II, 11 と同様に動詞 vi-ni-√vṛt は Ab. をとって「～をやめる」，「～から顔をそむける」の意味で，ここでも「享楽をやめる」あるいは「享楽の対象から顔をそむける」という意味になる．したがって，bhogehiṃ が本文に相応しい．

（3）pupphesu, bīesu, hariesu と -ehiṃ について

asaṇaṃ pāṇagaṃ vā vi khāimaṃ sāimaṃ tahā/
pupphesu hojja ummīsaṃ bīesu hariesu va//57//（Dasaveyāliya-sutta V, 1, 57）

チュールニの本文

asaṇaṃ pāṇagaṃ vā vi khādimaṃ sādimaṃ tahā/
pupphehiṃ hojja ummissaṃ bīehiṃ hariehiṃ vā//68// 下線筆者

シュブリング先生英訳：

food of any kind might bemingled with blossom, seeds, and plants.

松濤誠廉先生和訳：

食物と或いは飲物もまた，同じく嚼食と味食と，諸々の花の中に，種子の中に，或いは草（hariya ← harita ？）の中に混じりて在れば，

ハリバドラの注釈では，“puṣpaiḥ” jātipāṭalādibhiḥ bhaved unmiśraṃ, bījair haritair veti sūtrārthaḥ と -ehiṃ の複数・具格の読みを知っていたかのごとくの説明をして

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いる．AMg.ummissa-（Skt. unmiśra-）は accompanied by（Inst.）の意味で，具格をとって，「～と混じる，一緒になる」を意味する．ここでも，東部インド語の分からない人が，-ehiṃ を語形からみて，単純に Loc. と見なして，-esu に書き換えてしまった，のであろう．この場合，西部のジャイナ教徒は語形はもちろん，それに伴って意味も見失ってしまった．この詩節の意味はシュブリング先生訳のように「食物は，花，種子，草と混じっている」という意味になる．

おわりに

ここで問題とした「蜜蜂と托鉢僧」の比喩，「享楽を止める」という表現，そして，「食物は，花，種子，草と混じっている」という詩節の読みに関して，並行する仏教の『ダンマパダ』49 もジャイナ教の Dasaveyāliya-sutta のチュールニも共に，古代東部インド語，つまり古アルダ・マーガディー語の痕跡を残す古い表現をそのまま伝えていた．この一点において，すでに私は感動するのであるが，更に，この古い東部インド語の痕跡を残すチュールニの一見難解な読みは，現存のジャイナ教聖典の本文から除かれていたが，実は詩節の本来のオリジナルな意味を保存した古くて重要な伝承であった．チュールニはそれをわれわれに伝えていてくれたのである．つまり，ジャイナ教聖典の古注釈チュールニの読みは，現存聖典本文から消えてしまったのであるが，この詩節の古代の姿をそのまま現代にまで伝えてくれたのである．原始仏典において -ehi（Ab.）が -esu に書き換えられることに関しては，既にリューダース先生の『仏教の原始聖典の言語に関する観察』に詳しく論じられている．ここで原始仏典の言語に関してなされたリューダース先生の推測が，サンスクリット語の注釈（ヴリッティ）とプラークリット語の注釈（チュールニ）といった二つの伝承をもつジャイナ教聖典の本文伝承において実証されたことになるのではないかと考えられ，意義は大きいと考えられる．リューダース先生の想定する古代東部のマガダ語の語形は，仏典においてはあくまで想定形であって，現存の当該仏典の異読資料には見られないのであるから．

また，さらに注目すべきは，この現象は，インド言語の方言に関する基準を提供するアショーカ王碑文にも見られることである．「大官」を意味する mahāmantra- という語（RE VI）が，東部方言のダウリ碑文では mahāmāttehi とあるが，西部方言のギルナール碑文では mahāmātresu となっており[9]，ここにも東部と西部という地域の違いによって，その言語に -ehi（ṃ），-esu の二つの語形が

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

見られるのである．この二つの語形の違いは，ジャイナ教聖典の故郷が，マハーヴィーラが活躍したインド東部にあり，一方，聖典が，現在の形を整え編纂された最終結集の地が西部インドに移ったことと符号するのである．しかも，このような -ehiṃ を -esu に書き換えたと考えられる現象は，筆者の調査によれば今回の『ダサヴェーヤーリヤ・スッタ』のみならず，他のジャイナ教古聖典として知られる『アーヤーランガ』第1部,『スーヤガダンガ』第1部,『ウッタラッジャーヤー』といったジャイナ教白衣派の古聖典に14例見られるのである．（ただし『イシバーシヤーイム』は現在チュールニが発見されていないので調査から除外される）．この事実の発見は，ジャイナ教古聖典の伝承に関して，アルスドルフ先生がコレージュ・ド・フランスで行った講義のなかで示された「ジャイナ教研究将来の課題」[10] に示された提言にも共鳴する事実であり，ジャイナ教聖典の言語という観点から重要な問題を提供するものと思われる．

1）Ernst Leumann, *Daśavaikālika-sūtra und -niryukti nach dem Erzählungehalt untersucht und herausgegeben von Ernst Leumann*. ZDMG Band 46, 1892. pp.581-662.

2）松濤誠廉『ダサヴェーヤーリヤ・スッタ』大正大学研究紀要 53 輯，大正大学出版部，1968 年.

3）*Sayyaṃbhava's Dasakāliyasuttam with Bhadrabāhu's Niryukti and Agastysiṃha's Cūrṇi by Muni Shri Punyavijayaji*, Prakrit Text Society Series 17, Vanarasi-Ahmedabad 1973.

4）W. Schubring, *The Dasaveyāliya Sutta., Introduction, Text and Variants, English translation, Managers of Shet Anandji Kalianji*, Ahmedabad 1932. = Reprinted in Walther Schubring Kleine Schriften, herausgegeben von Klaus Bruhn, Glassenapp-Stiftung Bd.13, Wiesbaden, 1977.

5）中村元『ブッダの真理のことば　感興のことば』岩波文庫，東京，1978 年.

6）荻原雲来『法句経』，岩波文庫，東京，昭和 10 年.

7）Alsdorf: "Ardha-Māgadhī", *Kleine Schriften*, Nachtragsband, 1998, p.826; Les Études Jaina, état présent et tâches futures, College de France, Paris 1965. pp.16-17.

8）Heinrich Lüders: Beobachtungen über die Sprache des Buddhistischen Urkanons. Berlin: Akademie-Verlag, 1954. p.155, § 223.

9）Jules Bloch: *Les Inscriptions d'Asoka, Traduites et commentées*, Collection Emile Senart, Paris 1950. p.107.

10）L. Alsdorf, *Les Études Jaina, État présent et tâches futures*, College de France, Pari 1965. p.18.

〈キーワード〉 *Dasaveyāliya-sutta*, ジャイナ教白衣派聖典の本文，チュールニ

（大正大学非常勤講師）

NII-Electronic Library Service